

小坊主は俄かに大入道となった。目はギョロリと光り、大きな口をあげ、てんつるてんの
(ツンツルテンと同意語) 浴衣の裾から毛もじゃくらの脛を出し、今にも襲いかからんばかりの形相だ。太郎兵衛さんは臆せず組み伏せようとしたが、どうしたことかその瞬間身体がすうっと軽くなり気が遠くなってしまった。

村人は、太郎兵衛さんの帰りを今か今かと待っていたが、なかなか帰ってこないので大勢で様子を見に行った。あちらこちらと探したが影も形もない。仕方がないので夜の明けを待つことにした。朝になって再び探しに行ったがやっぱり姿が見えない。ところがひょっとあの大きな松の木を見上げると、びっくり仰天。太郎兵衛さんは、枝に衿を引っ掛け気を失ってぶら下がっていた。村中大騒ぎとなり梯子や筵、布団などを持ってきて、ようやく助け下した。

このことがあってから、村人は寄合をしてムジナを退治することに決まった。てんでに鎌や鍬、竹槍、棒切れを手に手に集まった。そこへ旅の坊さんが通り掛かり物々しい様子に何かあるのかと尋ねた。村人はこれこれしかじかとムジナの件を話した。坊さんは命あるものを殺しては可哀想だ。愚僧がムジナが化けて出ないようにやろうと、お経を唱え祈った。その晩から、ムジナは何処へ行ったのか姿を見せなくなった。

この古道の坂は冬になると凍って、一面鏡のようになり村人も旅人も大変難儀をした。そこで旅の僧は、村人に山から丸太を伐り出させ、道幅の長さに切り、適当な間隔に敷き段々を作り歩きやすくした。村人は、旅の僧の徳を称えてこの坂を御雁木坂(ごがんぎさか)と名付けた。いつの間にか「ごは(が)んぎょの坂」と呼ぶようになった。